新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2009.vol.3　37～43

風景構成法に表現される「石の大きさと位置」
ー青年期を対象としてー

運上　司子　　橘　玲子（新潟青陵大学大学院）
長谷川　早苗（新潟信愛病院）

キーワード：風景構成法　　石の大きさと位置　　青年期

The Large and Location of Stones in the Landscape Montage Technique on Adolescence

Shisako UNJO（Graduate School of Niigata Seiryo University）
Reiko TACHIBANA（Graduate School of Niigata Seiryo University）
Sanae HASEGAWA（Niigata Sin-ai Hospital）

Key words：landscape montage technique, large and location of stones, adolescence

Ⅰ．はじめに

石は、硬い単なる石ころから精霊の力を伝える礎石に至るまで広く、非常に多義的である。ミッチェル（1982）によれば、古来、大きい石は、家や神殿の礎石として設置される際には、石工が指定の地点へ杭を打ち込んで固定し、その上に中心となる石が置かれるのだそうである。世界の中心となる石は宇宙的な生命とつながっている。いわゆる、世界のへそである。古代のピラミッドも巨大な石の建造物であるが、岩井（1985）が述べているように、その閉じられた形の中にあるものは人間の内界に潜む存在の重みを想定させる。それがギリシャ神話のメドゥサ、旧約聖書のロトの妻などの物語になると、一人の人間が石の中に閉じ込められてしまうという不気味さが加わる。それに比べると、日本の庭に置かれた石は自然の中に溶け込んでいて美しい。加工されていない素朴な石が生命エネルギーを内包させて、静かで柔和な佇まいを見せている。ある絵本（「ロバのシルベスターとまほうの小石」）では、子どもが石の中に入り、成長して出てくるという死と再生のテーマを扱っているように思われる。つまり、石は独特の顔を沢山持ち、我々の想像力を掻き立ててくる不思議な“もの”である。

風景構成法（Landscape Montage Tachnique　以下ＬＭＴ）の中に描かれる石は、創案者の中井久夫（1970）が10個の描画項目の最後に定めたものである。筆者らは、その石の多義性に臨床的な関心を向け、注目してきた。先ず、新潟青陵大学大学院臨床心理学研究第１号（2007. 9）では、石と川との関連の多さについて知見を得た。と同時に、野原には大きい石が1個単独で描かれる特徴も見てきた。続く第２号では、複数回にわたるＬＭＴの描画経過から、石の表現がどのように変化するのかについて、統合失調症のＬＭＴを対象として検討した。捉えられた生活状況と病状経過は描画経過にどう関係しているのかに焦点をあてて、４つの群の石の特徴と意味を考察した。その詳細は省くが、その時に残った印象の一つは、比較的大きい石を結構描いているということであった。病んでいても心にまとまりができて落ち着いていく時には石が大きい１個となって風景の中に居場所を得ていく様子が見て取れた。また逆に、心が揺れ動いて主体性の危うい時には、大きい石が居心地悪そうな具合で描かれたり、手の届かないような位置に置かれたり、大きい石が道や川の流れを塞いで邪魔になっていたり等の様相がうかがえた。今

回、大きい石はどの程度、どのような位置に出現してくるのかを青年期のＬＭＴを対象として調べてみることにした。青年期は、荒々しい粗野な心の空間を自分が穏やかに住めるような地へと変容の迫られる時でもある。そのことを思い描きつつ、ＬＭＴの「石の大きさと位置」を取り上げた。

Ⅱ．方法

１．対象：Ｎ市内の福祉心理系大学生（２年生、３年生）、医療技術系専門学生（２年生）に施行したＬＭＴ、合計462枚をこの５年間程で資料として得た。そのうち、石の項目が描かれなかった2枚は除外して460枚のＬＭＴを対象とした。年齢は20～21歳である。男女比は圧倒的に女子が多い（表１参照）。

表１　男女比

	人　数	%
女　　性	359	78%
男　　性	101	22%
総　数	460	

２．方法：臨床心理学実習の授業において、クラス単位の集団でＬＭＴを行った。教示はB4の画用紙に10個の項目を描いてもらう通常の技法に準じた。彩色はクレヨン、クレパス、色鉛筆を用いた。実施にあたっては、ＬＭＴ拒否の自由を与えており、全員が自発的な了解の上でＬＭＴの作業に参加している。また、83名の対象者には、ＬＭＴの実施後に、「石を描いてくださいと言われて、その時、どのように感じたり、思ったりしましたか」と感想を記載してもらった。

３．整理：

１）石の大きさの定義

石の直径を３段階（2.5cm以上、0.6～2.4cm、0.5cm以下）の規準で分けて測定し、それぞれ、大きいサイズの石、中位のサイズの石、小さいサイズの石に分類し、大きい石の出現群をＡ群、中位の石の出現群をＢ群、小さい石の出現群をＣ群とした。Ｃ群には砂利などの数えられない類の石も含まれている。1枚のＬＭＴに大中小の石が混在してある場合には大きい石の方を優先して数量化した。石の形が歪んでいる場合には長い方の直径を優先した。

２）石が描かれた領域について

図１　用紙を９分割した位置と番号

1	2	3
4	5	6
7	8	9

用紙を９分割してそこに番号１～９を付けた。（図１参照）これは、「私を見つける心理テスト」（マイケル・ダニエルス（2000）老松克博訳）に述べられている空間位置と心理学的な意味に関する図（ウォッチワード・キイ）を参考とした。この図式においては、空間位置の上と下に前進と後退の意味を、右と左に外的なペルソナと内的なたましいの意味を置き、中央の空間にこの両極のバランスと緊張の意味を読み取り、その個性を把握しようとしている。

この用紙の位置に、Ａ群、Ｂ群、Ｃ群が石を描いた頻度（人数）を拾った（表３参照）。１個の石が用紙の複数の位置にまたがって描かれている場合には、石の大きい部分が描かれている位置の方を優先した。また、複数の石が複数の位置にまたがって描かれている場合には、より大きいサイズの石が描かれている用紙の位置を優先した。ここで、複数位置に亘る石の全てについて、その人数と石の大きさを数量化することは困難であった。そこで、描かれた全ての石が用紙の全位置にどのように散らばって分布しているかを整理した（表６参照）。

Ⅲ．結果

１）石のサイズと出現頻度（人数）

表２（表２参照）は、石のサイズで分けられたＡ群、Ｂ群、Ｃ群における対象者460名の出現頻度を出したものである。石が大きいサイズのＡ群は192名、42%であり、中位のサイズのＢ群は209名、45%であった。それに対して、小さいサイズのＣ群は59名、13%と、かなり低い結果を示した。青年期は比較的、大きいサイズの石を描くという結果が得られた。

表2　石のサイズA、B、C群・規準と出現頻度（%）

	大きさの規準	出現頻度（人数）	%
A群（大きい石）	2.5cm以上	192人	42%
B群（中位の石）	0.6cm～2.4cm	209人	45%
C群（小さい石）	0.5cm以下	59人	13%
合　計		460人	

2）描画領域と石のサイズについて

A群、B群、C群の描画者が、用紙のどの位置に石を多く描いたかについて整理した出現頻度が表3である（表3、図2のグラフ参照）。A群、B群、C群の間には石を描いた位置において、統計上χ^2検定による有意差がなかった。パーセンテージからその結果を整理してみる。用紙の下部領域（7，8，9の位置）に石を描いた人のパーセンテージはA群が53%、B群では51%、C群は50%と近似している。次いで、用紙の上部領域（1，2，3の位置）に石を描いた人のパーセンテージを整理すると、A群は15%、B群は13%、C群は18%と、どの群も共通して低いパーセンテージとなっている。結局、石はそのサイズに関係なく、用紙の下部領域（7，8，9の位置）の方に多く描かれ、逆に、用紙の上部領域に描かれることは少ないという傾向が分かる。次に、用紙の上部領域（1，2，3の位置）を除いて検討してみる。つまり、用紙の左寄り領域（4，7の位置）と右寄り領域（6，9の位置）と中央領域（5，8の位置）でA群、B群、C群の出現人数を比較した。A群は左寄り領域が31%、右寄り領域が29%、中央領域が26%でA群内の差はない。C群も左寄り領域が28%、右寄り領域が22%、中央領域が34%でC群内の差がほとんどない。それがB群になると、左寄り領域（4，7の位置）が22%、右寄り領域（6，9の位置）が24%に対して、中央領域が40%と幾分高くなる。このことからB群は用紙の中央領域（5，8の位置）に比較的集まる傾向を持っていると言える。

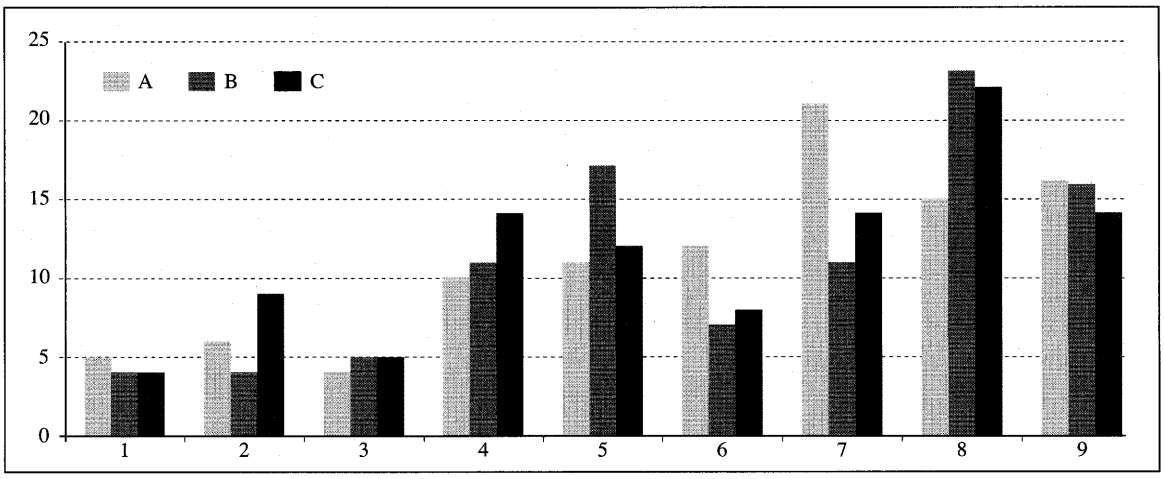
3）石のサイズと石の個数について

描かれた石の数をa. 1個、b. 2～5個、c. 6～10個、d.11～30個、e.31～多数の5段階に分類し、A群、B群、C群においてその出現頻度を整理した。描かれた石の個数から、3群の特徴を検討してみる（表4参照）。統計上、χ^2検定の結果、各群に有意差はなかった。しかし、そのパーセンテージから捉えてみることで、各群の傾向を把握してみる。表4において、A群、B群、C群それぞれにおいて、石の個数が1個から5個で少ない場合と、石の個数が11個から多数で多い場合とに分けて検討した。その結果、石が大きいサイズのA群では、石の個数が少ない場合は

表3　描画領域と石のサイズ（%）

サイズ＼位置	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
A　群	9（5%）	11（6 %）	7（4 %）	19（10%）	22（11%）	23（12%）	41（21%）	28（15%）	32（17%）	192
B　群	9（4%）	8（4%）	11（5%）	22（11%）	36（17%）	15（7%）	24（11%）	49（23%）	35（17%）	209
C　群	2（4%）	5（9%）	3（5%）	8（14%）	7（12%）	5（8%）	8（14%）	13（22%）	8（14%）	59
合　計	20（4%）	24（5%）	21（5%）	49（11%）	65（14%）	43（9%）	73（16%）	90（20%）	75（16%）	460

図2　表3のグラフ



85％と圧倒的に高く、石の個数が多い場合は７％と低くなる。他方、石のサイズが中位のＢ群をみると、石の個数が少ない場合は48％、石の個数が多い場合は39％であり、石の個数は多寡に差がなかった。石が小さいサイズのＣ群になると、石の個数が少ない場合は31％と低く、それが多い場合では61％と倍になる。結局、大きいサイズの石は個数が少なく、５個以下であり、小さいサイズの石は個数が多く11個以上である。中位のサイズの石は個数において特徴がなかった。これらの傾向に、描画内容の面から捉えられる特徴を少し付け加えて見ると、より了解可能である。つまり、お地蔵様、お墓、石橋、川の飛び石などは大きいサイズであり、当然、１個ないし数個で描かれている。サイズが中位の石の場合は１個の指輪、数個の花壇、家の踏み石から河原の側の石、多数の護岸に至るまで、石の個数は少数から多数であり決まらない。小さいサイズの石は護岸、河原の砂利、野原の砂利などであり、数えられない程の石も含み、多数の石として描かれることが多い。

４）石１個の描画領域について

石の個数におけるＡ群，Ｂ群，Ｃ群の違いを検討した結果３（表４参照）で明らかになったのは、石１個を描いた人が460人中、118人いて、それは全体の26％に当るということであった。そこで、その１個の石を用紙のどの領域（９分割した位置）に描いているのかを、Ａ群、Ｂ群、Ｃ群で分類し整理してみた。表５がその結果である（表５参照）。統計上、χ^2検定で有意差はなかった。しかし、パーセンテージから各群の特徴を検討してみる。Ａ群の中でも１個の石を描いた69人を詳細に見ると、用紙の左寄り領域（４、７の位置）で36％、右寄り領域（６，９の位置）で31％を示しているのに、それが中央領域（５，８の位置）では12％と低い出現率になっている。ここに、大きい石１個は用紙の中央を避けて、両脇に寄って描かれやすい傾向が読み取れる。これに対して、Ｂ群で石１個を描いた38人は、Ａ群と異なり、用紙の中央領域（８、５の位置）に50％が集まり、左寄り領域（４，７の位置）は13％、右寄り領域（６，９の位置）は19％と低めに出ている。小さいサイズのＣ群で石１個を描いた11人にもＢ群同様の傾向が見られ、用紙の中央領域（５，８の位置）に50％、左寄り領域（４，７の位置）に20％、右寄り領域（６，９の位置）に10％の結果が出ている。これらの傾向は、石１個の描画内容からも捉えられる。大きいサイズの石１個というのは、例えば、大きい像１個は用紙の中央領域には描きにくく、用紙の脇に寄せた方が落ち着くのであろうと推測される。中位のサイズと小さいサイズの石になると、川や道や家などの他の項目に寄り添って描かれることが多いので、用紙の中央領域に出てき易いことが納得できる。

５）石全体の分布状況について

描かれた石のサイズにも個数にも関係なく、用紙に布置された石全体の分布の整理を試みた。その結果、表６と図３のグラフに見られるように（表６、図３グラフ参照）、石のサイズに関係なく、石の描かれ易い領域があると言える。全体が上部領域（１，２，３の位置）には描かれず、中央の下部領域（８の位置）を中心に描かれている様子が見受けられるということである。ここまでの結果をまとめると、石の置か

表４　石のサイズと石の個数（％）

サイズ＼個数	1	2～5	6～10	11～30	31～多数	合計人数
Ａ　群	69(36%)	94(49%)	17(9%)	7(4%)	5(3%)	192
Ｂ　群	38(18%)	63(30%)	28(13%)	58(28%)	22(11%)	209
Ｃ　群	11(19%)	7(12%)	5(9%)	16(27%)	20(34%)	59
合　　計	118(26%)	164(36%)	50(11%)	81(18%)	47(10%)	460

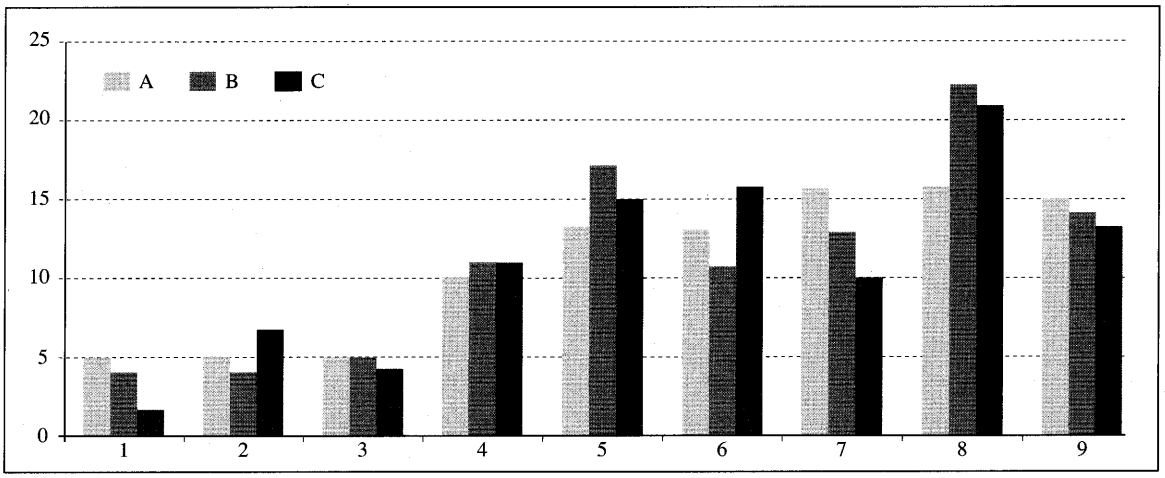
表５　石１個の描画領域

サイズ＼位置	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
Ａ　群	4(6%)	4(6%)	5(7%)	11(16%)	6(9%)	12(17%)	14(20%)	3(4%)	10(14%)	69人
Ｂ　群	2(5%)	3(8%)	2(5%)	3(8%)	7(18%)	1(3%)	2(5%)	12(32%)	6(16%)	38人
Ｃ　群	0(0%)	3(30%)	0(0%)	1(10%)	1(10%)	1(10%)	1(10%)	4(40%)	0(0%)	11人
合　　計	6(5%)	10(8%)	7(6%)	15(13%)	14(12%)	14(12%)	17(14%)	19(16%)	16(14%)	118人

表6　石全体の分布状況

サイズ＼位置	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
A　群	13(5)	14(5%)	15(5%)	29(10%)	37(13%)	37(13%)	46(16%)	46(16%)	43(15%)	280
B　群	10(4%)	10(4%)	11(5%)	26(11%)	40(17%)	17(11%)	31(13%)	52(22%)	38(14%)	235
C　群	2(2%)	6(7%)	4(4%)	10(11%)	13(15%)	14(16%)	9(10%)	19(21%)	12(13%)	89
合　計	25(4%)	30(5%)	30(5%)	65(11%)	90(15%)	68(11%)	86(14%)	117(19%)	93(15%)	604

図3　表6のグラフ



れる場所を決める時には、石の大きさが影響し、大きさを決めるのは石の内容であると推測される。

6）石の描画感想

ＬＭＴの実施後、石を描いた感想を83名に求めた。9名は記載がなく、74名の自由記載を得た。その内容を以下の項目に分類し整理した。つまり、a. 記載なし　b. 疑問、否定、戸惑い　c. どこに描くか悩む　d. 大きさに迷う　e. 感情移入　f. 石の様相、用途の6項目である。表7にその結果を示す（表7参照）。項目c「どこに描くか悩む」が35%で最も高く出ている。それに、項目b「疑問、否定、戸惑い」と、項目d「大きさに迷う」を合わせると68%に及ぶ。石を描く作業への取り組みに戸惑いと不快感の高さがうかがえる。また、項目f「石の様相、用途」では、じゃがいもみたい、貝殻風、きれいな指輪と説明したり、石橋、墓、護岸などと加工作業を伝えたりして、石を自分のイメージに調和させている姿勢も示している。

表7　石描画の感想項目

項　目	件数（%）
1．記載なし	9(11%)
2．疑問、否定、戸惑い	12(14%)
3．どこに描くか悩む	29(35%)
4．大きさに迷う	7(8%)
5．感情移入	9(11%)
6．石の様相、用途	17(20%)
合　計	83

Ⅳ．考察

青年期のＬＭＴを1枚ずつ見ていると、大きい石が置かれている印象を抱いてきた。手元にある中年期のＬＭＴでは、石が描画全体の中に自然に組み込まれていて、両者には違いが感じられる。そこで、先ず、青年期を対象として、石の大きさを一応、規定してから、その出現頻度と、用紙のどの位置に置かれているかを整理してみることになった。加えて、石を描いた際の感想（自由記載）からどのような意識と姿勢で石に向き合っているかを拾った。今回の研究は、石の大きさについて、20～21歳という青年期のみを対象として扱い、整理している。従って、

その特異性を検証するには資料不足である。今後、中年期など他の年代にもＬＭＴの実施を重ねて資料を得ていく計画である。とりあえず、予備的な調査の段階として、捉えられる特徴について述べ、考察をしておきたい。

１．石のサイズと描かれる場所について

ここまでの結果から、石はそのサイズに関係なく、石そのものが落ち着きやすい場所をもっていると言える。それは用紙の下方領域であり、精神内界の無意識に親和性があり、現実からより退避している空間につながっている。これはＬＭＴにおける石の描画の原点のように思われる。と言っても、石のサイズはそれが描かれる場所に全く無関係なのではなく、それなりの居場所を探している様子もうかがえる。つまり、墓石など、大きいサイズの石が１個、用紙のど真ん中に置かれることは少なく、用紙の脇に寄る傾向については自然なことかと納得できる。心の中でうごめいているものが大きい程、意識と無意識の領域に跨っていて、心理的な空間において脇に置きたくなるのは当然のことかと考えられる。一方、その抱えている問題が自分の手におさめられる大きさである時には、心の他の動きと何かしらで関わり、現実的な意識生活の中央でスポットライトが当てられることも想定される。花壇、家の踏み石の表現はそのあたりの状態を伝えてくる。ごく小さい石ころになると、意識生活から遠くにあり、けれども、確かに存在して心の全容を小さな光で支えているように想像される。また、数えられない程の砂利のような石の表現は心の世界で長い年月をかけ、その広い居場所を得た何かを思わせる。よく掴めないものであり、個人的な、あるいは、集団的な無意識の世界に属しているのかも知れない。

２．石のサイズと内容について

ＬＭＴにおいて石のサイズが決まるには、その前段階として、イメージされる内容があり、それが石のサイズや居場所に影響していると考えられる。その内容は個人的な世界からの産物である。その内容の意味をどう意識しているかの程度は個々人で違っており、お地蔵様から、無名の石ころまでさまざまであろう。今回の調査研究では、ＬＭＴに表現されている石の内容表現を中心に扱っていないが、個人史のレベルにおいて重要な要素であることを痛感した次第である。

３．石と青年期について

日本人が歌う“君が代”は「さざれいしのいわおとなりて」（さざれ石が大きな岩となって）と石の成長を希望している。人間の一生の中で最も自己像の形成課題に直面すると考えられる青年期においては、形態の定まらない無意識内の流れから出て、具象性のある意識的な出来事を体験し、現実的な、あるいは精神的な心の加工作業に取りかからなければならない。人格が変容し、また、宗教性に親和感を抱く時期でもある。永久不変で永遠性の象徴として崇められると同時に壊そうと意図すれば大きく変化する石のイメージは、青年期にとってどのような映像になっているのであろうか。小さい石ころや意味の定まらない砂利石は凝集してほどほどの大きさの石になり、青年の手の中で自分らしく捏ねられて、大きな理想像になったり、空疎な器になったりしているのかも知れない。

石を描いた時の感想では、「浮かばない」「嫌だ」「迷う」などが多く見られ、石のイメージは親しく馴染めないところに、日常的な意識生活から遠いところに在るようである。しかし、最も多かった描画感想の「どこに描くか悩む」という反応からは、描き手が最後の項目である石を置くに当たり、戸惑いながらも自分の描画全体に注意を向け、意識的に心の作業をしている様子がうかがえる。石の置き場所を決めるのは現実的な仕事であり、同時に、ＬＭＴの石は彩色という次元の仕事に繋がるまさに布石である。青年期のＬＭＴは不安定な動揺や幼さを匂わせるながらも、また、他方では、石の様相に「丸くてツルツルして」と丁寧なイメージを付与したり、個人的な夢なのか「指輪」を加工したり、「川を渡るのにどうしょうかと思っていたので、丁度、飛び石を置けて良かった」と戸惑いの中にも前向きな自己像を表現したりなど、青年の姿がほほえましく伝わってくる。

V．まとめ

1．ＬＭＴで描かれる石の領域は、石のサイズに関わらず、用紙の下方に集中している。詳細に見ると、大きいサイズの石は下方の両脇に寄りがちであり、中位と小さいサイズの石は中央に描かれる傾向がある。但し、統計上の有意差は確証されていない。

2．青年期における石のイメージは、意識生活から遠いところにありそうである。ＬＭＴで石を描くことに戸惑いを感じている。同時に、戸惑いながら、最後の項目である石において、描画という自分の仕事を振り返っている態度がうかがえる。

3．青年期（女子が多い）のみの資料では不十分である。今後、中年期を対象とした風景構成法の資料も加えた上で、再び、青年期の風景構成法に戻りたいと考えている。

註

本研究は青陵大学大学院共同研究費の助成を受けて行ったものである。

参考文献

ベヴァリー・ムーン編（1995）：元型と象徴の事典　橋本慎矩訳　青土社

ガストン・バシュラール（1972）：大地と意志の夢想　及川馥訳　思想社

岩井　寛（1985）：色と形の深層心理　ＮＨＫ　日本放送出版協会

ジョン・ミッチェル（1982）：地霊－聖なる大地との対話－　イメージの博物誌Ⅱ　荒俣　宏訳　平凡社

饗庭孝男（1971）：石と光の思想　勁草社

マイケル・ダニエルス（2000）：私を見つける心理テスト　老松克博訳　創元社

中井久夫（1984）：風景構成法著作集　別巻　山中康裕編集　岩崎学術出版社

奥田　勇（1988）：明恵上人と石（季刊　禅画報　第４号　明恵上人のこころ）千眞工藝

ウィリアム・スタイグ（1975）：ロバのシルベスターとまほうの小石　瀬田貞二訳　評論社